

ヤスミン監督の残したもの、それを受け継ぐ者たち ——マレーシア映画から見える世界——

篠崎香織

2010年7月25日、立教大学池袋キャンパスで、ちょうど1年前のこの日に他界したマレーシアの映画監督ヤスミン・アフマドに関するシンポジウムが行われた。このシンポジウムは、マレーシア映画文化研究会(京都大学地域研究統合情報センター共同利用共同研究プロジェクト)が主催し、立教大学AHC 平和研究ユニットおよび映画専門大学院大学の共催によって行われた。

シンポジウムは、さまざまな立場からマレーシア映画に関わる3人のパネリストによるパネルディスカッションと、ヤスミン監督の関連作品の参考上映を中心に進められた。

女優でありプロデューサーでもある杉野希妃氏は、韓国映画への出演経験を持ち、国境を越えた合作が進む近年のアジア映画の最先端を切り拓いている人物の1人である。ヤスミン監督が日本を舞台に撮る予定だった次回作『ワスレナグサ』にはプロデューサーとして参加することになっており、ヤスミン監督とは公私にわたって親交をもっていた。

マレーシア出身の映画監督であるリム・カーワイ氏は、日本に留学して工学を修めた後、中国で映画制作を学んで映画監督になった経歴を持つ。2009年に発表した最初の長編映画『それから』(After All These Years)は、中国のかつて自分が住んでいた地区に久しぶりに戻った青年がその地区の人びとの記憶にないという設定に始まるアイデンティティ探しを主題とした作品で、香港映画祭や大阪アジア映画祭で注目された。

山本博之氏(京都大学)は、マレーシアの民族関係史研究で知られるが、最近では京都大学のマレーシア映画コレクションおよびデータベースの構

築に携わり、劇映画を素材としたマレーシア社会の研究にも取り組んでいる。

シンポジウムでは、ヤスミン監督の最後の短編作品となった『チョコレート』を上映し、ヤスミン監督が残したメッセージの検討から始まった。インターネット上で公開されている3分間の短編作品である『チョコレート』の解釈をめぐっては、フロアの参加者を交えて、マレーシアの民族間関係やチョコレートの「甘さ」と母子関係などさまざまな角度からの「読み」が試みられた。「読み」は数多く出されたが、いずれにしる、この土地にもともと住んでいないために他の人びとより条件が悪いことに不満を持ちながらも、しかしそこから外に出て行くのではなく、この土地でやっぴいこうという強い思いが感じられるという意見には多くの人が納得したようだった。

続いて、同じマレーシアのホー・ユーハン監督がヤスミン監督を題材として制作した『ミン』と、ホー・ユーハン監督の短編作品である『アズ・アイ・レイ・ダイイング』を上映して、その内容を検討した。ヤスミン監督のメッセージである「この土地でやっぴいく」が、ヤスミン監督の盟友であるホー・ユーハン監督の作品にも強く見られることなどが議論された。

このように見ると、近年の「マレーシア新潮流」の監督たちは、いずれも「この土地でやっぴいく」というメッセージを込めた作品を作っていると誤解されるかもしれない。しかし、リム・カーワイ監督はマレーシアを離れて(日本経由で)中国に行って映画制作を学び、中国を舞台とした作品を撮っている。しかもそれが香港映画祭で注目されたということは、中華世界の中心地で評価される作品を作ったということである。ヤスミン監督の流れをついだホー・ユ

ーハン監督が「この土地でやっていく」と言ってマレーシア映画を撮り続けているのと対照的に、リム・カーワイ監督のようにマレーシアを飛び出して中華世界の中心地に乗り込んで中国映画を作り、それを中華世界に認めさせるまでになった人もいる。

このような多様な監督を「マレーシア出身者」と一括りで語るのが妥当であるかは別に検討すべきかもしれないが、このようなマレーシア出身の(特に華人の)若手監督が多く登場し、それぞれの方向で活躍しているのが近年のマレーシアの映画界をめぐむ状況である。

このシンポジウムは幅広い層の方々の参加を得た。狭い意味でのマレーシア研究者に限らず、映像文化に関心がある人や、異文化間の協力を携わっている人もいた。そのような人びとにとっては、このシンポジウムは、異質な人びととどのように接するかという問題を考える上で貴重な機会となったようである。

マレーシア華人のリム監督は、マレーシアには世界のいろいろな地域から集まった人がいるため、お互いに相手のことが信じられない状況で暮らしているとマレーシア社会の様子を描写した。これを受け

て山本氏は、お互いに文化背景が異なり、しかも流動性が高くて翌日になると別の土地に移っているかもしれない人びとのあいだでは確かにお互いに信じられないという感覚が生まれうるが、マレーシアの人びとは、お互いに信じられないことを前提にしながらどうすれば信じられないものどうしが協力できるかという生活の知恵を織り上げてきた人びとである。しばらく前まで日本で支配的だった言葉にせざともお互いの考えていることがわかるような社会を前提とするのではなく、言葉に出さない限りお互いの考えていることがわからないことを前提とすることで、そこで作られる人間関係や交渉術は今後の国際社会を考える上でも極めて重要な示唆に富む。開発途上国との国際協力を進める上での新しい枠組みにもなる可能性が大いにある。

振り返ってみると、これまで JAMS の研究会は歴史か政治経済を主題とするものが多かったように思われる。今回のシンポジウムのように文化を主題とすると、これまで JAMS に積極的にかかわっていたのとは異なる人びとの参加も多く得られることになる。文化芸術や芸能の方面でも JAMS の活動の幅を広げていければと思う。

